

# 神龜五年九月六日格の考察

亀 田 隆 之

「類聚三代格」卷十九禁制事に次のような格文が収められている<sup>1)</sup>。

勅。於圖書寮所<sub>レ</sub>藏 佛像及内外典籍書法屏風障子并雜図繪等類。一物已上。自今以後。不得<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>輒借<sub>二</sub>親王以下及庶人<sub>一</sub>。若不<sub>二</sub>奏聞<sub>一</sub>私借者。本司科<sub>二</sub>違勅罪<sub>一</sub>。

神龜五年九月六日

一読して明らかなように、図書寮所藏の仏像以下のさまざまな品物をたやすく貸出してはならないとの禁制の勅である。職員令に収められた図書寮の職務には、この格に見える仏像以下の諸物の管理が記されているので、その点を考えるならばとりたてて問題にすべきことではないようであるが、聖武天皇と藤原光明子との間に生まれた皇太子の病のため、この格の出された半月ほど前の八月二十一日に、その回復を祈っての大赦の令が出されていること、そしてまた、格の発令の五日後の九月十日にその皇太子が薨じていること、さらに皇太子の死をめぐって、当時の政權担当者であった長屋王が謀反の疑いに問われていることなどをみると、なぜこの時点でこうした内容の格が出されたのか疑問に思えてくるのである。そこでいま、関係史料を併せてその考察に当たろうと思うが、まず図書寮に関する

令の条文の検討から入ってみたい。

## 二

職員令6に収められた図書寮の条文は次の通りである。

頭一人。掌。経籍圖書。修撰國史。内典。仏像。宮内礼仏。校写。裝潢。功程。給紙筆墨事。助一人。大允一人。小允一人。大  
 属一人。少属一人。写書手二十人。掌。校写書史。裝潢手四人。掌。裝潢經籍。造紙手四人。掌。造雜紙。造筆手十人。  
 掌。造管。造墨手四人。掌。造墨。使部二十人。直丁二人。紙戸。

長官である頭の管理するものとして、経籍、圖書、内典、仏像等がある。経籍はいうまでもなく儒教の經典であり、  
 いわゆる五經六籍といわれるものである。これに対し圖書とは河図・洛書の類であつて、職制律20に

凡玄象器物。天文。圖書。讖書。兵書。七曜曆。太一雷公式。私家不得有。違者徒一年。私習亦同。其緯候及論

誦讖。不在禁限。玄象者。玄天也。謂。象。天為器具。以經星之文及日月所行之道。転之以觀時變。天文者。謂。日月五星廿  
 八宿等。圖書者。河出圖。洛出書是。讖書者。先代聖賢所記。未來徵祥之書。兵書。謂。太公六韜。黄石公三略之

類。七曜曆。謂。日月五星之曆。太一雷公式者。並是太乙。以占吉凶者。私家皆不得有。違者徒一年。若  
 將任用。言涉不順者。自從造妖言之法。緯候及讖者。五經緯。尚書中候。論語讖。並不在此禁限。

とあるように、陰陽道關係の、未來を予見するために必要な書であることから、個人が所有することは禁止されてい  
 たものである。内典が仏教の經典を指すことはいうまでもあるまい。仏像についても説明の要もあるまいが、令文に  
 見える宮内礼仏には、宮中の法会のさいに使用する仏具や調度品などが含まれよう（法会そのものは玄蕃寮の担当）。  
 また校写は書を書き写すことを意味するから、この語の中には書写の手本となる書法圖の管理が含まれていたとみて  
 よいように思える。

ところで、この令文は養老令であるので、既述の神龜格が出された時点での大宝令の当該条文がどのようなものであったかを検討しておく必要がある。令集解当該条古記によれば経籍圖書の注として「経五経也。籍六籍也。圖書在圖之書皆是也。」とあるところから、大宝令にも「経籍圖書」の語があったことが知られる。だが、内典以下の項目については古記が引かれていないため、その存否を知ることにはできない。

しかし当面問題にしている神龜五年の格は大宝令施行時の格であるから、当然のことながら大宝令を前提としているものである。従ってこの格文の中に、図書寮所蔵として「佛像及内外典籍書法屏風障子并雜図絵等類」と見えることは、少なくとも大宝令に佛像・内典・経籍圖書等の項目が存在したことを語るであろう。また宮内礼仏・校写の語の存在を暗示するとみても、それほど的外れではないと思われる。従って当面考察の対象としている（図書寮よりの容易な貸し出しが禁止となっている）諸項目は、大宝令の規定通りに図書寮に所蔵管理されているもので、この格はその貸し出しについての制限・禁止の命令ということになろう。

ここで格が「自今以後」貸し出し禁止といていることから、上述の諸物の貸し出しはこれまでにもしばしば行われていたこと、換言すれば、図書寮では需要に応じてそうした諸物を官人たちに貸し出すということが、令の規定には見えないけれども、職務の一つになっていたことが推測される<sup>③</sup>。ただそうした職務を持つとはいえ、この官司は少なくとも八世紀の段階においては、政治的にそれほど重要な役所とは目されていなかった。上述の諸物の所蔵管理、さらにはそれらの貸し出しといった実務的な官司として存在していたといえよう。それは正史である「続日本紀」に見える図書寮の官人の任命記事からも推測される。長官の頭に任命された官人を見ると、官位令に定められた従五位上の位階より高位の官人の任命は一例もなく、相当位或いはそれ以下の位の官人が頭に任命されているのを確認でき、また被任命者もとりたてて問題にしようような人物は任命されてはいないのである<sup>④</sup>。このことはやはり当時の政治におけるこの役所の性質を物語っているといっていよいであろう。

では、そうした役所所蔵の諸物の貸し出しについて、この格に示されているように厳しい禁止命令が出されたことはどのように考えるべきなのであろうか。

屏風や障子などの調度品は、それを借り出す家での私的な行事と関係するものであろうから、当時の貴族の中には、自邸での行事にそうしたものを必要とし、その調達のために図書寮所蔵の物品を借りるということがあったかも知れない。或いは書法を借り出して写経その他の行為に当たろうとしたかも知れない。当時の仏教の隆盛を見ると、多くの貴族がそうした行為に走ることは、容易に推測しうるのである。また一面において、そうした仏事が皇太子の病氣平癒を祈願してという名目のものもあったかも知れない。そうした行為をとることによって、聖武天皇や光明皇后さらには藤原氏との関係を有利に展開しようとする動きもなかったとはいえないであろう。しかしそのいずれにせよ、その行事は豪華なものになろう。

従って、いま皇太子の病氣平癒祈願の中にあつて、ともすれば本来の目的を逸脱した、そうした行為を抑止する意味で、その一因ともなる図書寮からの諸物の借り出しを禁じたものとも理解できる。それがこの神龜五年の格発令の意図の一つと考えられるが、とともにこの格が典籍や図絵の貸し出しも禁じていることに注意される。というのは、それらの中にはたんに仏教関係のいわゆる内典だけでなく外典も含まれ、その中には既述の個人所持を禁止されている陰陽道関係の図書などが含まれる危険性もあるからなのである。藤原氏所生の皇太子が、当時の官人に必ずしも歓迎されてはいなかったこと、その皇太子がいま病床にあることを考えるとき、呪咀行為の生ずる危険性も充分ありうることであろう。図書寮の所物の貸し出しの禁令にはそうした点も含まれていたと考えられるのである。

それならば、この格が、貸し出す側の図書寮の官人を違勅罪<sup>違勅罪</sup>で処分するとのみ記して、借りる側の処置をなら記さないのはどう理解すべきなのか。いうまでもなくこれら所物の管理責任は図書寮にあるわけであるから、その官人が借り出しに関して奏聞もせず貸し出してしまふのは、格に違背する行為として、厳しい処分を受けるのは当然で

あろう。ただ、そうすることによって、図書寮官人に事前の警告を發し、貸し出しに慎重ならしめるとともに、一般官人にもその借り方について、安易な態度を慎む姿勢をとるようこれまた警告を促したのではなからうか。従って借りだした側が、私的な仏事その他の行事に使用するような場合は、ことさらにこれを問題とするほどのこともなく、かりに奏聞を経ることなく借り出した場合、借りた官人側は比較的軽い処置で終っていたのであろう。しかしながら、陰陽道関係の圖書を何らかの名目で借り出して、これを不穩な目的に使用するといった行為は、嚴重に取り締まり重い処分に出るのは当然であつて、ことは状況如何で異なるものであろう。したがつてその処置を一律に決定しかねるものであるため、借りる側についての処置はこれを明示しなかつたのではなからうか。

しかし、格にいうように図書寮所管の諸物の貸し出しを禁ずるということは、考えようによつては、自己の財物の中にそうしたものをすでに所持している人々にとつては、この禁令はむしろ對抗者を一歩凌駕しうる手段としてきわめて有効なものになるということが考えられてくる。その点でこの禁令を發した政府の最高責任者が、当時左大臣であつた長屋王であることに注意が向けられる。というのは、いわゆる長屋王家木簡の出土によつて、当時の長屋王の豪華な生活が推測されるに至つたからなのである。しかもそのなかに、当面問題としてゐる事柄と関係のある木簡が多く見出される現状にある。そこでいま、それらを紹介しながら検討に当たつてみたい。

### 三

いわゆる長屋王家木簡の中に、先の神亀格に見える「書法」・「屏風」・「障子」などの語を含む木簡を見ることが出来る。以下必要な記載を重複するものを避けて、摘記すると次のようである。便宜上（A）・（B）に分類して説明していこう。

(A) 「書法模人米二升 (人名略)

家令

(木簡概報二十一)

「書法作人二〇米四升帳内三〇

(人名略)」

(同上)

「書写人二〇

(日付略)」

(同上二十三)

「書法僧」

(同上二十八)

(B) 「障子作画師一人米二升

障子作画師一〇帳内一〇米〇〇 (同上二十三)

[半升]

「屏風持雇人一〇米二升

(同上)

「障子作人三〇米六升

(人名日付略)」

(同上二十五)

(A) は書法を模写或いは作成する人物の存在を語るが、注目すべきは彼らがいずれも長屋王に私的に仕えている人々だということである。換言すれば、長屋王はこうした人々を使用して、中国の書の手本を複製していたわけである。図書寮で行われていた作業と同様な作業に従事する技術者を日常抱えていたわけで、従って図書寮から書法の類を、借り出す必要はなんらなかったということになるであろう<sup>⑥</sup>。

(B) も結局同じことである。調度品としての障子は、「表面に絵を描いているらしいので、今の襖や衝立の類とみることができ」るので、「儀式や行事のときに、主殿の母屋の仕切りにでも使っていた」<sup>⑦</sup>ものとみられる。その製作

者、そしてまたその屏風に然るべき絵を描く画師は、長屋王家に仕えていた人々であり、王家は必要に応じてこうした調度品をいくらでも所持できたわけである。そしてそれは屏風においても同様であった。長屋王家においては、こうした調度品について、その種類ごとに製作を分担するいわば專業の調度職人の存在が推測されるのである。

このように、木簡の記載から長屋王家の豪奢な生活ぶりが偲ばれるのであるが、王家においてはこうした調度品に限らず、その所有する書籍の類も多大なものがあつたであろうが、その中には緯書などの個人の所有を禁じられていた書籍や、また多くの陰陽道関係の書籍なども含まれていたのではなからうか。

いうまでもなく法的には個人所持を禁じられているものではあるが、自ら天皇家の一員であり、また父の系譜を訪ねるとき、有力な皇位継承者とも目されている存在<sup>⑧</sup>、そしてさらに左大臣として太政官政治の頂点に立つ長屋王としては、自らは他の皇貴族とは別であるとの姿勢を示すことがあつたのではなからうか。そしてそうした姿勢には、同じ皇族で知太政官事に就任している舍人親王や同じく有力な皇親である新田部親王、一方有力な官僚貴族であり、また光明子を通して聖武天皇と密接な関係にある藤原四家への対抗意識があつたであらう。

従つて、考えようによつては、この神亀五年の格の発令は、皇太子の病状を利用して、自己以外の皇族の奢侈を抑える一方、所持禁止の図書等の利用による不穩な行為（例えば呪咀といったような）を取り締まろうとの意図を濃厚に含むものであつたと見られるのである。

だが皮肉なことに、そうした王の姿勢は、皇太子の病状が重くなり、この格を出した五日後、薨ずるに及んで、かえって逆効果を生む結果になつてしまつた。さきに藤原宮子の大夫人称号事件でいわば藤原氏全体を敵に回していた王は、皇太子の死により皇位継承権を主張できる立場にあるばかりに、今度は藤原氏の標的とならざるをえなくなつたのである。神亀五年の格文の発令された翌年二月、長屋王は「私学左道、欲傾国家」<sup>⑨</sup>と密告されるに至つた。神亀の格文の意図したうちの一つの面、つまり個人所持を認められない典籍の所持が、王による皇太子の呪咀ひいて国家

に対する謀反との、密告の格好の理由となったのではないかと推測されるのである<sup>40</sup>。

## 四

以上、神亀五年九月六日の格について検討を加えてきた。最初にも記したように、その発令時期を見ると、その内容はただたんに表面的に理解するだけではすまされないものがあること、むしろ、政治的な意味をかなりに含んだものと理解すべきではないかと思われたため、長屋王家木簡の記事などを参照しながら、上のような事柄を考えてみたわけである。

長屋王家木簡の出土・整理によって、長屋王事件を間に挟んで、その時期の政治的諸問題の考察は飛躍的に進められ、長屋王の政治的立場や行動などについての理解も深められたといえる。ただこうした中であって、この神亀五年の格は意外に無視されていたようである。しかし、密告事件を間近かに控えて政治的緊張が高まっていたと見られるこの時期に、こうした格が発令されたことはやはり看過することはできないのではなからうか。そうした観点から若干の検討をおこなってみたわけである。小論が長屋王事件の理解にいかでも役立つことがあれば幸いである。

## 注

(1) 新訂増補国史大系「類聚三代格」五八九頁

(2) 書法とは、文字の書式また手本をいうが、ここに記されている書法は後者の意である。著名な書法としては、天平勝宝八歳六月廿一日付の「東大寺献物帳」に載せられている王羲之の書法廿卷がある（大日本古文書四―一二四―六）。なお堀江知彦『書道の歴史』昭和三八年至文堂一―一二頁参照。

(3) いま一例を挙げるならば、天平勝宝七歳四月二十一日付け「造東大寺牒」（大日本古文書二五―一八五―一九三）によれば、



図書寮所管の縁起聖道經一卷以下一三四卷の經文が、借り出されていることが知られるのであって、このように図書寮所管の經文は、必要に応じ貸し出しの多かったことが知られる。

(4) いま「続日本紀」に見える図書頭の任官を表示すると次のようである。

天 平 三・六・庚寅 阿倍朝臣梗虫 從五位下

五・十二・庚申 吉田連宜 從五位上

九・十二・壬戌 秦忌寸朝元 外從五位上

十五・六・丁酉 林王 從五位下

天平勝宝 元・八・辛未 御方大野 從五位上

神護景雲 二・二・癸巳 豊野真人奄智 從五位上

宝 龜 元・八・辛亥 日置造養麻呂 從五位上

五・三・甲辰 藤原朝臣是人 從五位下

八・十・辛卯 藤原朝臣末茂 從五位上

九・二・庚子 藤原朝臣長山 從五位上

延 暦 元・八・乙亥 安倍朝臣常嶋 從五位上

八・三・戊午 津連真道 從五位上

十・三・辛巳 長津王 從五位下

いづれも図書頭の相当位である從五位と同位か、それよりも下である。また政治的に重要な動きをした人物を見出すことは困難である。

(5) 違勅罪はこれまで職制律22にいう

凡被詔書、有所施行而違者、徒二年

との規定が適用され、徒二年と考えられていたが、最近はこの条は詔書発給手続きにおける違背を対象とするものであり、これをそのまま適用は出来ず、八唐第六の大不敬対捍詔使条と併せて、むしろ違勅罪に科すとの処置が宣されたその時の事柄の内容性質に応じて、処分がなされ、量刑が適用されるものと考えられている。

以上の叙述については東野治之『書の古代史』(一九九四年 岩波書店) 九四〇九五頁参照。

(7) (6) 奈良国立文化財研究所編『長屋王邸宅と木簡』(平成三年 吉川弘文館) 九五頁(小池伸彦氏執筆)

(8) この点については拙稿「親王・王の子の叙位」(『日本古代制度史論』昭和五五年 吉川弘文館)を参照されたい。

(9) 新訂増補国史大系「続日本紀」一一五頁 天平元年二月辛未条

(10) このような観点から見ると、神亀五年九月二十三日の日付けを待ついわゆる長屋王願経(大日本古文書二五―五〇六)は、この年の五月十五日に王の発願により、写経を開始されたのであるが、その事業が終了し、経文が納められたのは、皇太子の薨じた十三日後の九月二十三日だったのであって、こうした王の行為も、跋語の文章とあわせて王を倒すための恰好の名目の一つとなったかも知れない。